『みねさんの　あぁ、そうなんだ塾』　【第６回】

ミツの吉岡に対する「可哀そう」という感情は、自分が〈上から目線〉で困っている人や弱い人を見下して感じるものではなく、彼女の〈こころの底からあふれ出すもの〉であり、**『本能的に他人の哀しみの上に自分の哀しみを重ね合わせざるを得ないもの』**であると広石氏は言います。この小説では、同じような場面が何回か出てきます。そのたびに「わたしだったら、どうするだろう？」と考えていただきたいと思います。ミツの人生の歩みが、いかにたくさんのことを問いかけてくるか …… それは、わたしたちが〈命がけで答えなければならないような問いかけ〉でもあるのです。

ぼくの手記（三）（p.48～70）

次の日曜日、吉岡は**『誰か他人がミジメで、辛がっているのを見ると、すぐ同情して』『自分のことなどすっかり忘れて、そのミジメな相手を懸命に慰めようとする』**ミツの性格を利用して旅館に誘い、その欲望を満足させます。**『あんた、もう、寂しくない？』**と、身体を差し出してでも吉岡の寂しさを癒そうとしたミツの献身は、吉岡にとって**『もう二度とこんな娘とは寝たくねえや』**というほどのものでしかありませんでした。渋谷駅で別れる時、**『いつ、今度、会って…』**と、電車の扉の外で叫ぶミツを見て、**『誰が二度と会うもんか、お前なんかと』**と心の中でつぶやく吉岡でした。

そんな吉岡に対して、「こいつ、とんでもねぇヤツだ」「女性をなんだと思っているのよ」「男の風上にも置けねぇヤツだ」 … と感じた方がほとんどでしょう。そうですよネ。そのとおりです。吉岡には、何の後ろめたさもなかったのでしょうか？

前回、吉岡が小児麻痺のゆえに女の子にもてなかった話をすると、ミツは**『そんなら … 連れてって』**と言ったとき、もうすでに欲望は消えていた ― という話を書きました。なぜ、彼は何もしなかったのでしょう？　**『この娘の切ない懸命さがなぜか、ぼくらしくもない憐憫と悔いとに似た感情をこみあげさせたのだ。俺は最低の人間だな。もし、今、この女の好意を自分の欲望のために利用すれば、俺は最低な人間になるな』**と思ったからでした。〈人間としての良心〉は、吉岡の心の片隅にちゃんとあったのです。

そんな彼は同時に、**『だが、人をひっかけ利用するのは俺だけじゃないぜ。金さんだって（中略）そうじゃないか。（中略）今はみんながそうやっているんだ。やらない奴は今の世の中じゃ損をするのさ』**と開き直る人間でもあるのです。

自分は〈最低の人間〉という自覚をもちながら、〈みんながやっている〉と、《みんな》という言葉を使って自分の行為を正当化し、さらに損得勘定を持ち出して〈良心からの逃走〉を図っているのです。

《みんな》

《みんな》― 〈うそ〉を含んだ言葉です。子どもたちは「だって、みんながもってるもの！」と言って、欲しいものをおねだりしますよね。《みんな》といる安心感と、〈ひとりだけ違うこと〉への不安をいだく大人たち（特に若者たち）も多い気がします。《真実の自分》をどこかに隠して生きている大人たちがたくさんいるように思うのは、わたしだけでしょうか。

《みんな》 ― こわい言葉です。〈多数決の原理〉で民主主義は成り立つと言われます。《みんな》がそう思うことは、正しい ― これが〈多数決〉の根本的な考え方です。たしかにそれを採用しないと、何も決まりません。でも、少数意見をまったく無視すると、かつて歩んだ〈間違った道〉を歩みかねません。少数意見をどのように活かしていくか ― それが大切だと思います。みんなが正しいということは〈いつも正しい〉とは限りません。

《みんな》 ― 自分を正当化する言葉です。吉岡が使いました。いえ、わたし（たち）もたびたび使います。「みんなそう思っているはずだから」「みんながやっているはずだから」 … 。でも「はず」であるがゆえに、ほとんどの《みんな》は《100%》をあらわすものではありません。自分の後ろめたさを封じ込め、忘れるために《100%》と考えたいのです。

さあ、ここで《罪》という、キリスト教にとってはとても重要な言葉を考えなくてはなりません。「いやぁ～、よわったなぁ … 」というのが正直な気持ちです。この重い言葉を、どう〈わかりやすく〉〈ふかく〉説明したらいいんだろうと考えると、キーボードを叩く指の動きが鈍ります。でも、これは避けて通れないことなので、たくさんの本に助けてもらいながら続けます。

《罪》について（その１）

まず「罪」とは何かを、辞書から教えてもらいましょう。(用例は省略します)

……

つみ【罪】一　①道徳（宗教・法律）上、してはならない行為。②道徳（宗教・法律）にそむいた不正な行為に対する処罰。③よくない結果に対する責任。　二　相手を本当に思うなら、してはいけない事をする様子。(『新明解国語辞典』)

もう一つ。井上ひさしさん推薦の『角川必携 国語辞典』では、

つみ【罪】①社会に害を与える、法律にそむいたおこない。犯罪。また、道徳や宗教のうえでしてはならないおこない。②悪いおこないやあやまちに対する責任や処罰。③思いやりのない、無慈悲なようす。

……

私たちが【罪】という言葉を耳にすると、まず思い浮かべるのは二つの辞書の最初にある「法律上してはならない・不正な行為」、つまり「殺人」「傷害」「盗み」 … など**【犯罪】にあたる行為**でしょう。もし、あなたが教会に行って「あなたは罪人なのです」と言われたらどうでしょう。「とんでもありません！　私は人を殺したことも、傷つけたことも、物を盗んだこともありません！　何をおっしゃっているんですか！」と反発するのではありませんか？　あるいは、「悪いことをしている政治家や、人を何人も殺したような人間を新聞やテレビのニュースで知っていますが、わたしのやったことなんて、**それに比べればたいしたことはないもの**です … 」と弁明するでしょう。では、教会が説く【罪】とは、何を指すのでしょう。

【引用した書籍】

・広石廉二　**『遠藤周作のすべて』**(朝文社、1991)
・遠藤周作　**『わたしが・棄てた・女』**　(講談社文庫、1972)
・山田忠雄 他　**『大きな活字の 新明解国語辞典 第七版』**(三省堂、2012)
・大野　晋 他　**『角川 必携 国語辞典』**(三省堂、2004)